二〇二二年一〇月七日

朝露の珠の輝く花野かな　きよえ
出格子の古町の路地秋夕焼　もとこ
放牧の花野に牛の目は静か　素秀
生涯を農に終へたり草の花　宏虎
長き夜の紅茶に浸す銀の匙　ひのと
雨に濡れとぼけ顔なる案山子かな　千鶴
答弁のしどろもどろや赤い羽根　たか子

二〇二二年一〇月六日

奥山に薪割る音や冬隣　みきお
川澄むやどんぐり一つ投げもして　明日香
味噌蔵は奥より昏れて秋深し　ひのと
虫の音に目瞑る母の足洗ふ　ひのと
秋天に白き腹見せ飛行船　素秀
啄かれて熟柿の傷の無惨かな　あひる
稜線のかくもくつきり秋うらら　もとこ
金風や翼のごとく腕のばす　たか子

二〇二二年一〇月五日

赤い羽根つけて何やら誇らしげ　明日香
泣き顔や藁づくりなる案山子翁　素秀
好物の栗おこは詰め友見舞ふ　むべ
鰹船黄金の波を曳きもどる　ひのと
女生徒の白のソックス爽やかに　満天
おしやべりな風通ひくる花野かな　かえる
五束ほどガードレールへ稲架あまり　明日香
風の意に従ふごとく黄落す　きよえ
秋桜や面会室の十五分　あひる
新藁の匂ふ牛小屋灯ともりぬ　みきお

二〇二二年一〇月四日

トルソーの首に巻き尺蔦の窓　ひのと
棉ふくや子等の育てる農園に　たか子
手探りで閉ざす門虫の闇　うつぎ
夕日落つ稲穂は深く頭垂れ　きよえ
掃き均す朝の境内秋の声　豊実
夜学子の舟を漕ぎゐる路線バス　かえる
亡友の面影に似し秋の雲　あひる
追伸のごと揺れやまぬ秋桜　ひのと

二〇二二年一〇月三日

金色の夕陽をはねて赤とんぼ　きよえ
背後より来て影となる秋の蝶　せいじ
木犀を掃きし箒も匂ひ立つ　かえる
ゆく雁の空をよぎりし夕庇　ひのと
指にタコして皮剥くや栗ご飯　そうけい
玉垣を吹き抜く風やこぼれ萩　ぽんこ
柿吊す日にち薬といふくすり　ひのと
引越しの荷物見送り鰯雲　豊実
群れなして秋蝶渡る渦の瀬戸　千鶴

二〇二二年一〇月二日

ものさしで背中掻きもす夜なべかな　なつき
朝露や厩舎に眠る引退馬　ひのと
えのころのくすぐりやまぬ地蔵様　明日香
煙草火とすれ違ふなり霧の夜　ひのと

二〇二二年一〇月一日

交番はいつも空つぽ虫すだく　うつぎ
倒伏の稲田に傾ぐ案山子かな　もとこ
怪獣の着ぐるみ走る運動会　智恵子
水澄て繰り返し鯉数える子　ふさこ
秋天へ朱の大鳥居威を放つ　はく子
保育園お昼寝タイム小鳥来る　たか子
白線を引き直す昼運動会　みきお